世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

Learning Outcomes of in-Person Class in Teacher Training Course of Online University : A Case Study of Health Physical Education Class ‘Wellness’

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-11-15
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 井上, 望, 川上, 暁子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/646

大学通信制の教員養成課程における スクーリングの学習成果

―健康体育科目「ウェルネス」の実践を通して―

Learning Outcomes of in-Person Class in Teacher Training Course of Online University
—A Case Study of Health Physical Education Class ‘Wellness’—

井　上　　望*
INOUE Nozomu
川　上　暁　子†
KAWAKAMI Akiko

1．はじめに

日本における通信教育の創起は明治期にあり、正規の大学教育課程としての通信教育は大戦後から始まった。その後1990年代から、通信教育課程を設置する大学・短大の数は増加をみせている。かつては郵便による手紙を使って行われてきた通信教育も、今ではインターネットを使って授業の映像視聴やレポートの提出が行われている。インターネットによる学習は、学習者のペースで場所も時間も自由に選んで学習できることが長所であり、課題提出や授業者への質問に要する手間や時間がそれほどかからず、利便性を兼ね備えた学習手段と言える。しかし、授業者または他学習者との直接的な関わりがないことで、学習ペースと学習動機を保ちにくいことが短所になり得る。また、教員養成を通信教育で行う場合、在宅学習という、対人、対話のないその学習環境で、教育現場で必要とされる力量を培うことはできるのか。通信教育では、‘スクーリング’と呼ばれる面接授業（授業者と対面して実施される授業）が学校教育法によって義務付けられている。このスクーリングが、全課程に占める時間数は多くないものの、人と関わり、体験を通して学ぶことができる機会となる。小池ほか（2016）は通信教育において教育の効果は学習者自身の学ぶ力にかかっているが、自己主導的な学習者としては未熟であるため学習支援が必要であると述べている。また、大学通信教育は、学習者にただ教員免許を出す機関であってはならないとも述べていることから、通信制の教員養成課程において学習支援の面でもこのスクーリングの授業が機能していることが必須であり重要だと考える。

以上のように通信制の教員養成課程においてスクーリングは重要であると考えられるが、現在までに行われているスクーリングに焦点を当てた研究は、扱われる教材の研究（大島2016）や

*駿河台大学　† 武蔵野大学教育学部

実施の形態（石原ほか2016）などであり、受講者個人の学習成果についてはあまり研究されていない。そこで本研究では、通信制で行われる身体活動を伴うスクーリングの授業を通して、受講者が何を考え、何を学ぶのか、その具体的な内容の分析と検討を行いたい。また、結果を基に、通信制で教員に必要な力量の育成にどう取り組めるか考えを深め、今後展開する授業プログラムと研究への課題を得たい。

２．健康体育科目「ウェルネス」のスクーリングについて

本研究の健康体育科目「ウェルネス」とは、M大学の通信教育部、教育学部児童教育学科において学科の共通科目として位置づけられる科目で、正式な科目名は「ウェルネス演習SR」である。内容は、テキストによる自習を基にレポートを作成する在宅学習と、大学にて授業を実際に受けるスクーリングの履修によって構成される。2013年度から本科目のスクーリングは開始され、受講者の増加に伴って2015年度より２名の授業者の協働によって実施されている。受講者は、学科内の３専修（小学校教諭免許の取得のための小学校専修、中学校・高等学校教諭免許の取得のための国語科専修・英語科専修）に属し、いずれも教員免許の取得を目指す者である。スクーリングの目標は、‘ウェルネス’という科目の名称にあるように、より良く生きることを体験的に考え、自身の生活において心身を良い状態に保つ実践ができる能力を培うことである。内容として、インターネットによる在宅学習ではなし得ないことに重きを置き、身体活動であり体験から得られる学習であること、また、グループやペアによる他者との協働的実践を多く取り入れた。

スクーリングの計４日間、１日当たりの授業時間は約６時間（休憩含まず）、その内容と流れを表１にまとめる。

表１：スクーリングの内容（年度別）

2015年度／平日４日連続で実施				
	１日目	２日目	３日目	４日目
１限	オリエンテーション 自己紹介	筋力トレーニングとは	コンディショニング フットサル	レクゲーム
２限	レクゲーム	ストレッチ 筋力トレーニング	働くことと健康	ユニホック
３限	ドッヂボール	水泳	ストレッチ バスケットボール	単位認定試験
４限	探しものゲーム	水泳	足し算マラソン	
2016年度／土日２日連続を２週に渡って実施				
	１日目	２日目	３日目	４日目
１限	オリエンテーション 自己紹介	筋力トレーニングとは	コミュニケーション ワーク・エアロビクス	コンディショニング
２限	レクゲーム	ストレッチ 筋力トレーニング	働くことと健康	ユニホック
３限	フットサル	水泳	ドッヂボール	単位認定試験
４限	探しものゲーム	水泳	足し算マラソン	

３．研究目的と研究方法

本研究の目的は、健康体育科目「ウェルネス演習SR」のスクーリングの学びに着目し、実際に身体を動かし、人との関わりを通して学ぶ授業において、受講者がどのような学習成果を得ているかを明らかにすることにある。

表２：対象者の性別および年齢層の一覧

開講年度	2015 年度			2016 年度		
年齢層	男性	女性	合計（名）	男性	女性	合計（名）
10 代	1	1	2	0	0	0
20 代	9	6	15	12	2	14
30 代	2	4	6	1	3	4
40 代	1	2	3	1	5	6
50 代	0	3	3	0	1	1
60 代	0	0	0	0	1	1
合計	13	16	29	14	12	26

研究対象は、2015年度M大学通信教育部で行われたスクーリング「ウェルネス演習SR」を履修した29名、および2016年度M大学通信教育部で行われたスクーリング「ウェルネス演習SR」を履修した26名、計55名の受講者である。（各年度の男女の内訳および年齢層は表2参照）

分析対象として、スクーリング4日目の単位認定試験の後に、受講者に記入を任意でお願いした授業への感想文（自由記述）を取り上げる。履修者には成績とは関係なく、授業について考えたことや思ったことを自由に記述するように指示をした。両年度とも受講者の全員が記入し、回収後に確認したところ、白紙や汚損、無関係な記述もなく、全て分析対象として有効と判断した。分析には以下の手順を踏んだ。なお、2015年度と2016年度はプログラムおよび日程が異なる（表1参照）ため、別々に分析を行った。

手順1：スクーリング担当者2名により、全記述の中からスクーリングによる受講者個人の学習成果が書かれている文章の抽出を行った。スクーリングへの評価や要望と判断した文章は除外した。さらに抽出した文章を、内容から4つに分類し、各分類を「気づき、学び」・「変化」・「決意」・「その他」と名付け以下の分析を行った。

手順2：文章の分類ごとにテキストマイニングソフトkhcoderを使用し、「複合語の検出」「語句の強制抽出」の設定を行った。

手順3：前処理を行った後に「抽出された語句」について検討を行い、意味が同じであるが、異なる語句について統一を行った。例えば、「自分の体」を示す語句として「からだ」「身体」「体」の3つが語句として検出され、その3つを全て「体」と変換した。なお、元の文章も参考にし、通常、同じ意味として使われる語句（例えば先生、教師、教員など）であっても、文脈から同じ意味として使用されていないと判断した場合は、同じ語句に変換しなかった。

手順4：精査されたデータを用いて、共起ネットワークの描画、階層的クラスター分析を行った。なお、共起ネットワークでは強い共起関係ほど太い線で、また出現数の多い語句ほど大きい円で描画するようにし、描画数を60にしたうえで結果を図示した。また階層的クラスター分析では語の最小出現数を2に設定し、Ward法を用いて分析を行い、Jaccardの距離を1以上のものとした。

４．分析と考察

4.1　2015年度「気づき、学び」のデータ分析と考察

2015年度の「気づき、学び」については47文、29段落が抽出された。また、語句としては457語が抽出された。（出現回数が「2」以上のものをまとめたものは補足資料2を参照）「人」「感じる」が最も多く9、次に「多い」が7、「実感」が6と続いた。

次に抽出された語句を用いて共起ネットワークを描画した結果、「体」「実技」を中心とした共起関係が見られた。また、3つの独立した共起関係が確認された。（補足資料1図1）

さらに階層的クラスター分析を行った結果、8つのクラスターが検出された（図2）。クラスター１は「担当教員」「スクーリング」「参加者」「講義」などを含んだ授業運営に対する学び、気づきである。クラスター２は「伝える」「分かる」のみで構成された相互理解に対する学び、気づきである。クラスター３は「最初」「参考」「授業」「学べる」で構成された授業自体に対する学び、気づきである。クラスター４は「レクリエーション」「経験」「人」「見る」などで構成された体験活動の大切さに対する学び、気づきである。クラスター５は「体育」「注意」「知る」などで構成された授業で体育を取扱う際のポイントに対しての学び、気づきである。クラスター６は「スポーツ」「感じる」「不安」「実感」などで構成された運動自体に対する学び、気づきである。クラスター７は「出来る」「体」「覚える」「使う」で構成された自分の体についての学び、気づきである。クラスター８は「コミュニケーション」「学ぶ」「構造」「心」などで構成された対人関係に対する学び、気づきである。

以上の分析結果から共起ネットワー

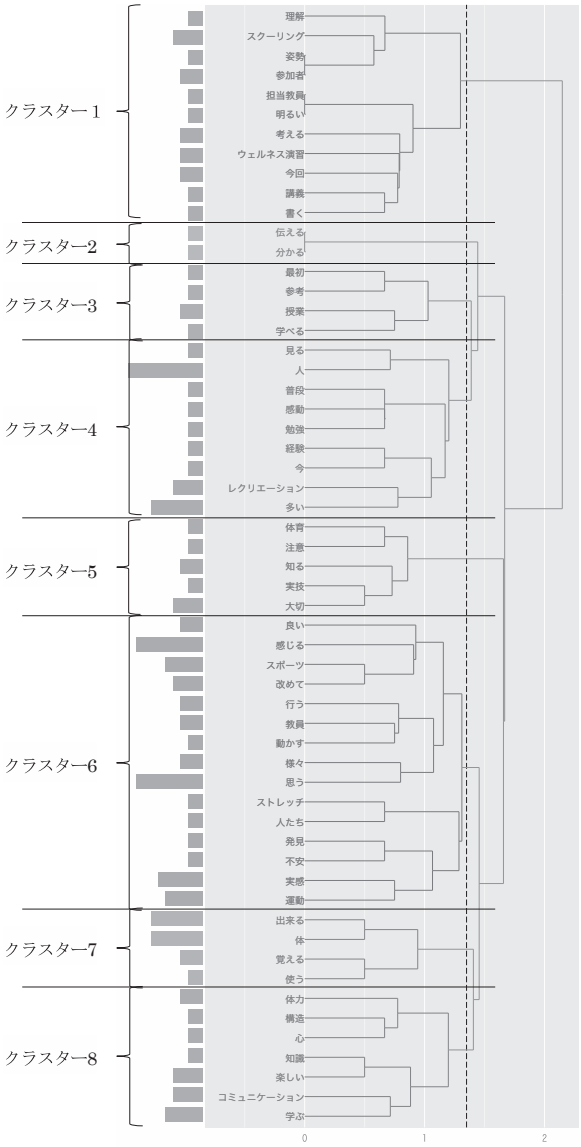

図２：2015年度「気づき、学び」の階層的クラスター分析結果

クの描画、階層的クラスター分析の2つで共通していることは体を動かすことを通して学ぶ、気づくことが中心となっていることである。特にクラスター4､クラスター6に含まれる単語が多く、人を見たり、実際に体を動かしてスポーツを改めて良いと気づいたりしていると解釈することができる。さらにクラスター8については、スポーツを通して人と関わり、人との関わりの大切さを学んでいると解釈することができる。

また、「体を使って、動きながら学ぶことで、机上でのコミュニケーションよりはるかに自然に人間関係を築くことが出来る」「運動を通して、体の仕組みなどに関する知識、体を動かすことの楽しさ、コミュニケーションなど、様々な面で忘れかけていた運動の重要性を改めて学ぶことができました。」という記述もあり、体を動かす重要性やその中で学べることを受講生は実感していると解釈できる。

4.2　2015年度「変化」のデータ分析と考察

2015年度の「変化」については22文、17段落が抽出された。また、語句としては290語が抽出された。（出現回数が「2」以上のものをまとめたものは補足資料2を参照）「する」が最も多く20、次に「できる」が13、「不安」が8、「運動」が7と続いた。

次に抽出された語句を用いて共起ネットワークを描画した結果、「動かす」「体」「感じる」を中心とした共起関係が見られ､1つの独立したまとまりとして中心性が確認できた。（補足資料1図3）

さらに階層的クラスター分析を行った結果､5つのクラスターが検出された。（図4）クラスター1は「指導」「持つ」「初めて」「プール」「泳ぐ」で構成された体験による指導意識の変化である。クラスター2は「多い」「レクリエーション」「体育」で構成された体育に対する認識の変化である。クラスター3は「緊張」「初め」「苦手な種目」「苦手意識」で構成された運動に対する意識の変化である。クラスター4は「体」「スクーリング」「運動」「始まる」などで構成された運動を要因としたスクーリングに対する意識変化である。クラスター5は「楽しい」「感じる」「年」「人」などで構成された他人との関わり方の変化である。

以上の分析結果から全体的に体を動かすことが要因となり、運動や他人との関わりなどに対する意識の変化が多いことがわかる。特にクラスター3とクラスター4は次の階層で統合されており、体育においてレクリエーションを多く取り入れることが、受講生の苦手意識の改善や緊張緩和につながっていることがわかる。

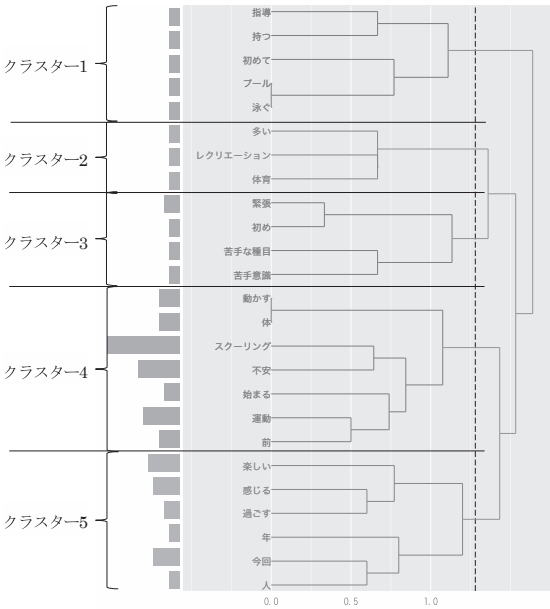

図４：2015年度「変化」の階層的クラスター分析結果

また、「通信教育ではスクーリング以

外で人とコミュニケーションを取る機会が少ないが、今回のスクーリングのように楽しく過ごしていければ、年齢や性別の分け隔てなど感じることなく、仲間意識を持つことができるのだと感じた。」「多くの種目を行うと思い、苦手な種目は事前に練習をするほど今回のスクーリングは心配事だらけでした。しかし、この４日間、毎日楽しくスポーツをすることができました。体を動かすことで楽しいと思えたのは初めてでした。」という記述もあり、体を動かすことで自分の気持ちや他人との関係に変化があったと考えられる。

4.3　2015年度「決意」のデータ分析と考察

2015年度の「決意」については10文であり、共起ネットワークの描画および階層的クラスター分析は行わなかった。実際の文章は、「これからはエクササイズの様なものを少しずつ、計画を立て、継続させていきたいと思っています。」「毎日時間を決めて簡単なストレッチをするといった工夫を生活に取り入れたい」などの、今後の生活にスクーリングでの学びをどう活かしていくのかが中心である内容であった。

4.4　2016年度「気づき、学び」のデータ分析と考察

2016年度の「気づき、学び」については37文、23段落が抽出された。また、語句としては448語が抽出された。（出現回数が「2」以上のものをまとめたものは補足資料２を参照）「する」が最も多く21、次に「なる」が15、「体」が13と続いた。次に抽出された語句を用いて共起ネットワークを描画した結果、「知る」「想像」「動かす」を中心とした共起関係が見られた。ほぼ、１つの独立した共起関係が見られた。（補足資料１図５）

さらに、階層的クラスター分析を行った結果、７つのクラスターが検出された。（図６）クラスター１は「幅広い」「年齢層」「一緒」「方々」「経験」で構成された他人と運動することに対する学び、気づきである。クラスター２は「関係」「緊張」「緩和」「マラソン」「勝ち負け」で構成され

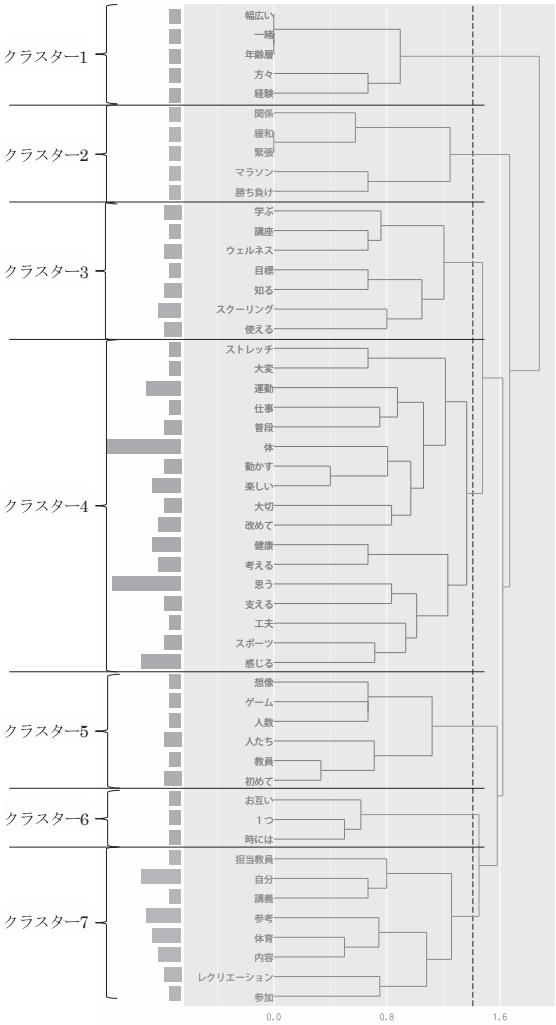

図６：2016年度「気づき、学び」の階層的クラスター分析結果

た運動の方法に対する学び、気づきである。クラスター３は「学ぶ」、「スクーリング」「ウェルネス」などで構成されたスクーリングに対する学び、気づきである。クラスター４は「体」「運動」「思う」「感じる」で構成された体を動かすことに対する学び、気づきである。クラスター５は「想像」「ゲーム」「教員」「人数」で構成された人に教える方法についての学び、気づきである。クラスター６は「お互い」「1つ」「時には」で構成された対人関係に対する学び、気づきである。クラスター７は「担当教員」「自分」「参考」などで構成された授業運営に対する学び、気づきである。

以上の結果から、受講生の学びや気づきは体を動かすことが要因となっている。その学びや気づきの内容としては主に授業運営や対人関係、指導方法であり、また、講義の周りに共起関係があまりないことから、スクーリングで体を動かすことで、学びや気づきを促進していると解釈できる。また、階層的クラスター分析で得られたクラスターについても、運動を要因とした学びの内容で分けられているため、同じ解釈ができる。さらに、「運動を通してお互いを知り合うレクリエーションから始まり性別も年代も超えて、時には競い合い、また時には協力しあって1つのことを達成するという、久しく成し得ていなかった事を思い出した。」「普段、意識したことのない体のあちこちを伸ばしたりすることで自分の体をすみずみまで感じることができた。」「プログラムも無理のないように工夫されていると思った。工夫をすれば色々なハンディをもった人たちと共に同じスポーツを楽しめることができる可能性があることがわかった。」という記述もあり、体を動かすことで上述した学びがあったことがよくわかる。

4.5　2016年度「変化」のデータ分析と考察

2016年度の「変化」については22文、17段落が抽出された。また、語句としては302語が抽出された。（出現回数が「2」以上のものをまとめたものは補足資料２を参照）「する」が最も多く9、次に「できる」が8、「なる」が7、「とても」「思う」が6と続いた。

次に抽出した単語を用いて共起ネットワークを描画したところ、「コミュニケーション」「年齢」「教える」「ウェルネス」を中心とする共起関係が見られた。また、1つの独立した共起関係となっており、中心性を確認できた。（補足資料１図７）

さらに、階層的クラスター分析を行ったところ、6つのクラスターが検出された。（図８）クラスター１は「受ける」「ウェルネス演習」「体育」「前」で構成された授業前後の変化である。クラスター２

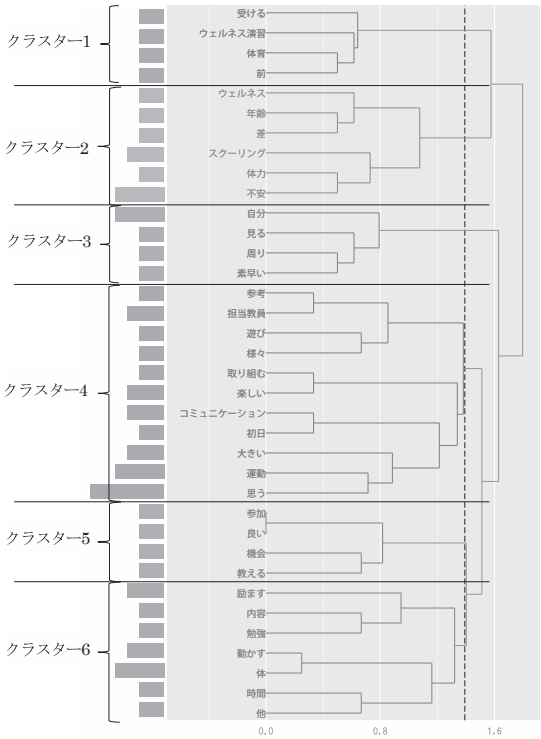

図８：2016年度「変化」の階層的クラスター分析結果

は「不安」「スクーリング」「年齢」などで構成された運動に対する認識の変化である。クラスター３は「自分」「見る」「周り」「素早い」で構成された運動能力に対する自己評価の変化である。クラスター４は「思う」「コミュニケーション」「楽しい」などで構成された運動への取り組み方の変化である。クラスター５は「参加」「良い」「機会」「教える」で構成された運動に対する意識の変化である。クラスター６は「体」「動かす」「励ます」などで構成された運動と勉強のつながりに対する認識の変化である。

以上の結果より、「コミュニケーション」は共起ネットワークにおいて中心となっており、階層的クラスター分析においても一番含まれる単語の多いクラスター４に分類されていることがわかり、スクーリングがコミュニケーションの場となっていると解釈できる。また、「コミュニケーション」との強い共起関係として「初日」があり、クラスター内でも「大きい」「運動」「思う」と統合されていることから、運動を通したコミュニケーションワークが受講生に与える影響は大きいと考えられる。また、「運動を通じて、単なる健康になるための動き、というだけでなく今までのことを振り返りつつのこれからどのようにしていかなければいけないのかなどの意識の変化が大きかったと思います。」「参加者間のコミュニケーションという面で見ると、初日の教室に入った瞬間に比べて、劇的に円滑なやり取りが行われるようになったと思います。」という記述もあり、コミュニケーションを要因とした変化があったと考えられる。

4.6　2016年度「決意」のデータ構成および分析と考察

2016年度の「決意」に分類された文章は６文であったため、共起ネットワークの描画および階層的クラスター分析は行わなかった。文章は「ここからはまた一人での勉強になりますが、クラスメイトも頑張っていると思いつつ私も頑張りたいと思います。」「自分が体感した事を忘れないようにします。」「今後、少しスポーツを無理のない範囲内で進めていきたいと思うようになった。」などであり、2015年度と同様に、スクーリングで学んだことを日常生活にどのように活かしていきたいかという内容であった。

５．まとめ

本研究では、身体活動を行うスクーリングの学びに着目し、運動を行うと共に、人との関わりを通して学ぶ授業において、受講者がどのような学習成果を得ているか明らかにすることが目的であった。その目的に沿って本研究を以下にまとめる。

① 授業の進め方や教員の関わりの大切さについて実体験を通して学んでいることが分かった。知識として学んだ教育法や指導法がより具体的に活かせる実践的な知識となったのではないか。

② 普段の生活や学習で気づくことのできない「他人とのコミュニケーションの大切さ」「運動の楽しさ」に気づき、「自分の体や運動能力に対する認識」を養える可能性が示唆された。

③ 今回のスクーリングのような対面式かつ対話のある身体活動の授業は、身体活動を通したコミュニケーション方法の学びの場となっていることが分かった。

④ 自己主導的な学習者として脆弱であることに気づく機会としてスクーリングは適していると考えられ、通信教育の学生たちの学びの促進につながることが考えられる。

6．展望と課題

本研究の分析と考察から、身体活動を目的としたスクーリングの授業を通して、受講者がどのような学びや気づきを得ているのか、また体験的な学びによって心境や肉体がどう変化し、個々の生活における良く生きるための思考へとどのように繋がるのか、一端を知ることができたと考える。今回の結果を基に、さらなる事例研究が必要である。

今後の研究方法の課題として、受講が全て終わった段階での記述による学習成果の把握では、どの場面でどのような学びや変化が生じるのかが分からない。よって受講者には毎日感想を記述するように促し、授業内容またはスクーリングの実施状況と照らし合わせて、その分析・検討を行いたい。また本科目は、教員免許取得のためには必修の科目であるが、免許取得の先に実際の学校現場で勤務を希望するのか否か、事前に受講者の受講目的を把握したい。

最後に、通信制における授業研究と同時に、卒業に留まらず教員免許の取得に際して、どのように教員としての質を保証していくかを考えていく必要がある。通信制の在宅学習では養えない力量ほど、教育現場で必要になると考えられ、それは身体活動を伴って他者と関わる力であり、集団の中で求められる役割を果たすことができる力ではないだろうか。教育現場で必要とされる力量と、入学者の能力や経験値との隔たりを埋めるようなプログラム、また、そうした力量を育成するようなプログラムの開発も研究の見通しとして挙げられる。

参考文献

秋山 豊「大学通信教育における生涯学習支援の推移と動向」大正大学大学院研究論集（36），pp197-206, 2012-03

石原 朗子ほか「大学通信教育のスクーリング実施の変化とその要因に関する考察：大規模文系大学A大学の事例をもとに」佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集（02），pp65-80, 2016-03-25

板橋 政裕「児玉九十 明星大学における通信教育部の開設：教育の機会均等、大学教育の門戸開放を目指して」明星大学明星教育センター研究紀要（4），pp11-17, 2014-03

内山 淳子「成人の生涯学習を支援する大学通信教育：佛教大学通信教育課程の社会人学生調査をもとに」佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集（02），pp29-46, 2016-03-25

大島 寛「近畿大学通信教育部の健康スポーツ科学の授業展開（その5）ゴールドッヂを教材として」教養・外国語教育センター紀要. 一般教養編 6（1），pp1-11, 2016

葛城 浩一「ボーダーフリー大学における学士課程教育の質保証（3）当該大学教員の意識に着目して」大学教育研究（24），pp53-66, 2016-03 神戸大学大学教育推進機構

小池 源吾・藤井 伊津子「大学通信教育と教員養成」吉備国際大学研究紀要. 人文・社会科学系（25），pp125-135, 2015-03-31

篠原 正典「通信教育課程の学生の現状と抱える課題：学生へのアンケート調査から」佛教大学教育学部学会紀要（15），pp1-16, 2016

田島 貴裕「通信制大学における大学規模の規定要因」日本教育工学会論文誌 35（Suppl.），pp37-40, 2011

那須川 哲哉「テキストマイニングを使う技術／作る技術―基礎技術と適用事例から導く本質と活用法」東京電機大学出版局，2006

福田 崇男ほか「特集 小中高等学校、大学、通信教育サービス 情報化で変わる学校教育」日経パソコン（663），pp70-77, 2012-12-10

藤井 伊津子・小池 源吾「大学通信教育への入学と学習活動の実態」吉備国際大学研究紀要．人文・社会科学系（25），pp137-147, 2015-03-31

補足資料１（共起ネットワーク一覧）

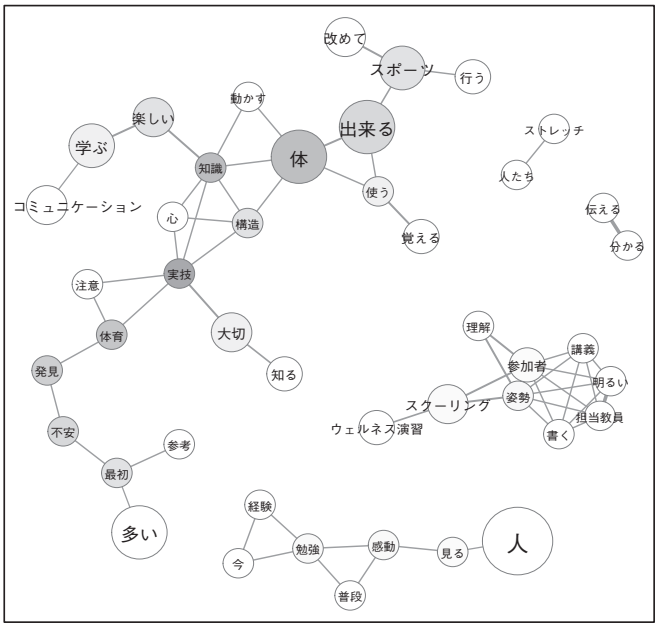

図１：2015年度「気づき、学び」の共起ネットワーク

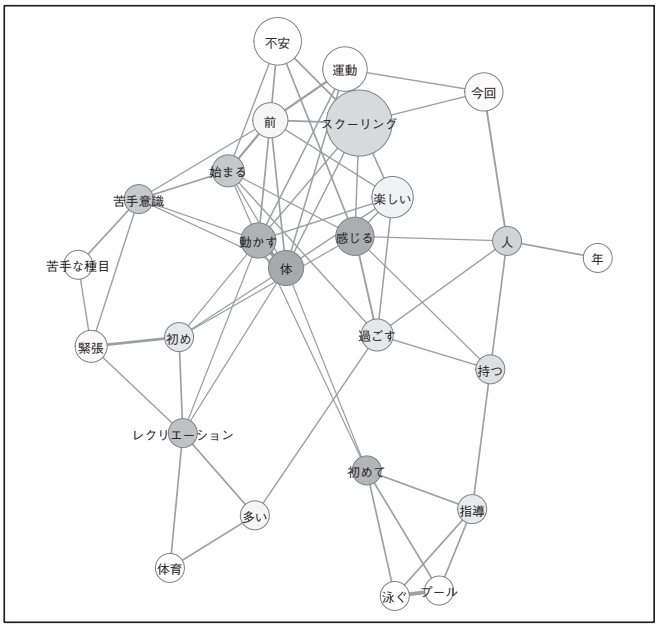

図３：2015年度「変化」の共起ネットワーク

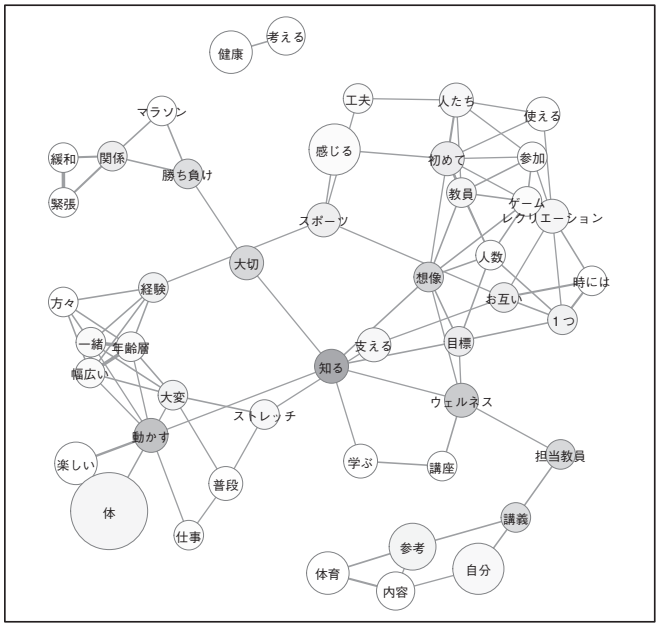

図５：2016年度「気づき、学び」の共起ネットワーク

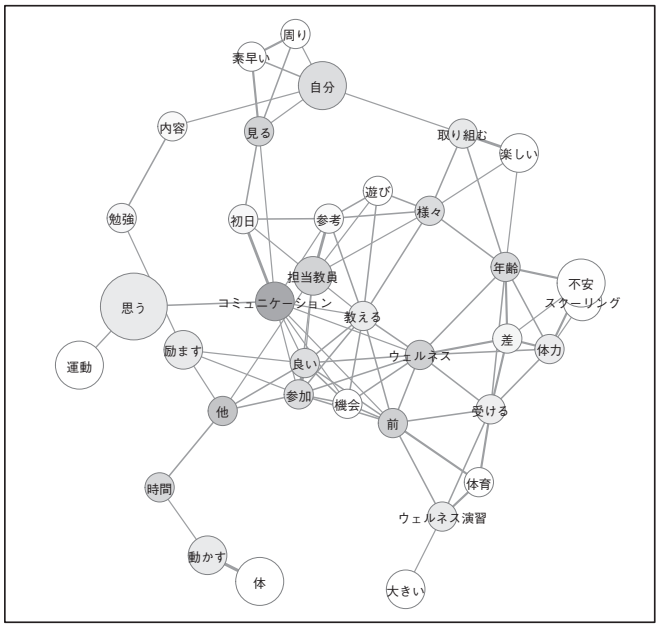

図７：2016年度「変化」の共起ネットワーク

補足資料2（抽出された語句の一覧）

2015年度				2016年度			
気づき		変化		気づき		変化	
単語数	457	単語数	290	単語数	448	単語数	302
する	27	する	20	する	21	する	9
なる	10	できる	13	なる	15	できる	8
人	10	不安	8	体	13	なる	7
感じる	9	ある	8	思う	12	思う	6
思う	9	運動	7	ある	10	とても	6
できる	9	スクーリング	6	できる	10	ある	5
ない	9	楽しい	6	自分	7	ない	5
出来る	7	ない	6	感じる	7	自分	4
多い	7	授業	5	いう	7	運動	4
体	7	今回	5	運動	6	不安	4
実感	6	感じる	5	参考	6	体	4
ある	6	前	4	体育	5	コミュニケーション	3
スポーツ	5	動かす	4	健康	5	スクーリング	3
運動	5	なる	4	楽しい	5	担当教員	3
学ぶ	5	とても	4	ない	5	動かす	3
コミュニケーション	4	体	4	とても	5	励ます	3
スクーリング	4	種目	3	スクーリング	4	楽しい	3
レクリエーション	4	緊張	3	内容	4	大きい	3
大切	4	ウェルネス演習	3	考える	4	機会	2
楽しい	4	過ごす	3	改めて	4	周り	2
改めて	4	始まる	3	スポーツ	3	初日	2
やる	4	プール	2	レクリエーション	3	体育	2
教員	3	体育	2	大切	3	体力	2
体力	3	指導	2	普段	3	内容	2
授業	3	苦手	2	ウェルネス	3	年齢	2
様々	3	初め	2	人たち	3	遊び	2
今回	3	苦手意識	2	学ぶ	3	参加	2
ウェルネス演習	3	泳ぐ	2	使える	3	参考	2
参加者	3	持つ	2	支える	3	勉強	2
覚える	3	多い	2	知る	3	様々	2
考える	3	初めて	2	動かす	3	時間	2
行う	3	いう	2	初めて	3	前	2
知る	3	人	2	やる	3	ウェルネス	2
良い	3	年	2	やはり	3	ウェルネス演習	2
とても	3			ない	3	教える	2
ストレッチ	2			1つ	2	見る	2
構造	2			お互い	2	取り組む	2
最初	2			ゲーム	2	受ける	2
姿勢	2			ストレッチ	2	素早い	2
実技	2			マラソン	2	良い	2
体育	2			教員	2	いう	2
知識	2			講座	2	いる	2
感動	2			勝ち負け	2	わかる	2
経験	2			人数	2	いい	2
講義	2			方々	2	ない	2
参考	2			目標	2	差	2
注意	2			一緒	2	他	2
発見	2			緩和	2		
勉強	2			関係	2		
理解	2			緊張	2		
不安	2			経験	2		
今	2			工夫	2		
普段	2			講義	2		
人たち	2			参加	2		
担当教員	2			仕事	2		
学べる	2			想像	2		
見る	2			大変	2		
使う	2			担当教員	2		
書く	2			年齢層	2		
伝える	2			幅広い	2		
動かす	2			時には	2		
分かる	2			きっかけ	2		
明るい	2			いる	2		
いう	2			わかる	2		
とる	2			いい	2		
にる	2			こんなに	2		
ない	2			よく	2		
心	2						